

「書くこと」の指導方法の研究 —意見文の指導モデル作成を通して—

有田川町立御霊小学校
教諭 石井 静佳

【要旨】

全ての児童が意見文を書くことのできる指導モデル作成を通して、「書くこと」の指導方法を研究した。書けたという達成感を味わわせるためには、「何を」「どう」書くのかという書く技能を身に付けさせることが重要である。

本研究では、意見文を書くために必要な技能を身に付けさせる手立てを各学習過程に組み入れた指導モデルを作成した。この指導モデルに沿って指導することにより、全員が意見文を書くことができた。また、児童が意見文の学習で身に付けた技能を、それ以外の文章を書くときにも応用することができた。

【キーワード】

意見文の指導モデル　書く技能　手立て　書く意欲　ワークシート　付箋紙　モデル文

1 テーマ設定の理由

(1) 本校児童の実態から

平成 21 年度全国学力・学習状況調査及び T K 式領域別標準学力検査の結果から、本校の児童の現状として、国語科の評価の観点の「書く能力」が弱い、言語能力等の基礎的な力が身に付いていない、最後までやり遂げようとする力が弱いといった傾向が伺える。これらの課題から、本校では昨年度から研究主題を「学ぶ意欲と力を育てる—国語科『書く』活動を通して—」と設定して、授業研究を行っている。

これまでの実践において、授業中に児童から「何を書けばいいのかわからない」「どう書けばいいのかわからない」という声を聞くことがあった。書く題材を見つけられない児童や書き方がわからない児童は書くことに対する抵抗が大きく、意欲も低い傾向にあった。

(2) 社会情勢及び学習指導要領から

近年、私たちの生活を取り巻く社会環境が急速に変化してきている。国際化や情報化の進展に伴って、自分の考えを論理的に、かつ説得力を持った言葉で表現する能力や自分の考えや主張を的確にまとめて発信する能力を育てることが、これまで以上に求められている(注1)。

平成 23 年 4 月から実施される小学校学習指導要領の国語においては、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することを重視すると示されている(注2)。これからの社会で求められる論理的に思考し発信する能力を、国語科教育の中で高めることが求められているのである。

本研究では「書くこと」に焦点を当て、これらの力を児童につけることを目指した。児童が自分の考えをまとめ、文章として表現することを積み重ねることによって、自分の考えを論理的に表現することができるようになることを考える。

さらに、「書くこと」の言語活動例として示されている事例のうち、意見を記述した文章(以下、意見文と表記する)を書いたり、編集したりすることに着目した。読む人全員が納得する意見文を書くためには、考えの根拠を示し論理的に述べる必要がある。児童が意見文を書けるようにすることは、国語科で重視されている論理的に思考し表現する能力を育てることにつながると考える。

(3) 指導モデルについて

これまでの指導を振り返ってみると、「書くこと」の指導過程において、「何を」「どう」書かせるかという手立てが不十分だった。そのため、児童の書く力を十分に向上させることができなかったのではないかと考えた。そこで、意見文を書くために必要な技能を身に付けさせる指導モデルを作成した。このモデルに沿って指導することにより、児童に書く力をつけ、書けたという達成感を味わわせることで、書く意欲も高めることができるのではないかと考えた。

2 研究の内容

全ての児童が意見文が書けるようになる指導モデルの作成を通して、「書くこと」の指導方法を研究した。書けたという達成感を味わわせ、書く意欲を高めるためには、「何を」「どう」書くのかという書く技能を身に付けさせることが重要である。本研究では、意見文を書くために必要な技能を身に付けさせる手立てを各学習過程に組み入れた指導モデルを作成して実践した。うまくいったところとうまくいかなかったところを検証し、さらに、意見文以外の文章を書かせる指導に応用できないか考えた。このようにして、児童がさまざまな文章を書くことができる指導方法を研究した。

(1) 意見文を書くために必要な技能

新学習指導要領解説国語編（文部科学省 2008）では、現行指導要領に比べ、学習過程がより明確に記されている。

「書くこと」の学習過程は、課題設定や取材、構成、記述、推敲、交流の5つで構成されており、各学習過程に指導事項が示されている。表

表 1 意見文を書くために必要な技能

学習過程	意見文を書くために必要な技能
課題設定 や取材	・自分の意見をもち、根拠となる事柄を集めることができる技能
構 成	・文章全体の構成の効果を考えることができる技能
記 述	・事実と意見を書き分けることができる技能 ・意見が伝わるように書くことができる技能
記 述	・表現の効果などについて確かめたり工夫したりすることができる技能
交 流	・表現の仕方に着目して助言し合うことができる技能

1は、指導事項をもとに、意見文を書くために必要な技能を学習過程ごとにまとめたものである。

(2) 意見文を書くことができるようにするための手立て

学習過程に沿って、意見文を書くために必要な技能を身に付けさせるための手立てを示す。

ア 【意見文を活かす場を知らせる】〈課題設定や取材の過程〉

児童の書く意欲を喚起するために、書いたものを活かす場を児童に知らせることが大切だと考える。苦勞して書いた文章なのに、ただファイルに綴じて終わりということの繰り返しでは、児童の書く意欲は湧いてこない。書いたものを活かす場を知らせることは、誰に向けて書くのかという相手意識や何のために書くのかという目的意識を持って書かせることにもつながる。例えば、意見文を小学生向けの新聞に投稿することや校内に掲示するということを知らせることで、「自分の意見が他の人に伝わる意見文を書こう」「実践してもらえるように伝える工夫をしよう」という意欲を持たせたい。

イ 【交流や話し合いの場の設定】〈課題設定や取材の過程〉

課題設定の過程では、テーマについて調べてきたことや意見を交流する時間を十分にとる。交流することによって、自分の経験を思い出させたり、友達の意見を参考にさせたりして「何を書けばいいのか分からない」という児童が一人もいなくなるようにする。

野口編（2009）は、自分の立場をはっきりさせるために、まずノートに○△×などで友達の意見や発言に対する自分の考えを記号で書かせてから、そのような判断をした理由を端的に「一言でずばりと」書かせる実践をした。そこで、本研究において、意見文を書く時に自分の意見をはっきりと意識させるために「一言でずばりと」を取り入れることにする。一文で書いた意見を交流させることによって、自分

の意見をもてない児童には、他の児童の書いた文を参考にさせる。

また、取材の過程では、自分の意見を読む人に納得してもらうためには、どのような内容をどのような方法で調べたらよいのかということを、学級全体で話し合わせる。話し合ったことを参考にして、自分の意見に適した取材内容や取材方法を決めることができるようにする。

ウ 【事実と意見を理解させるためのワークシートの利用】〈取材の過程〉

読む人に自分の意見を納得してもらうためには、根拠を示さなければならない。根拠となる事柄は事実であるから、文章の中で事実と意見を区別させることが必要になってくる。瀬川監修（2007）のステップワーク集を参考に、事実と意見を理解させるためのワークシートを作成する。それを用いて、根拠となる事実に基づいて意見を書く練習をさせる。

エ 【付箋紙の利用】〈取材・構成・交流の過程〉

森川編（2010）は、「書けない子」「書かない子」にいきなりまとまった文章を書かせるのではなく、達成感を体験させたり、充実感を感じさせたりする指導を実践している。例えば、言葉集めや吹き出しを書かせるなど、ノートや用紙に自分の字を埋めることで達成感を体験させたり、箇条書きの数が増えた、作文が○枚になったなど、書くことの足跡を見て充実感を感じさせたりする。この実践のように、短文をたくさん書かせることの効果は大きいと考える。

本研究では、取材・構成・交流の過程で付箋紙を利用して短文を書かせる。付箋紙には次のような利点がある。

- ・書くスペースが小さいので、書くことへの抵抗が少ない。
- ・1枚の紙を埋めたという達成感を積み重ねることができる。
- ・付箋紙の枚数が増えていくことで、内容が増えていくことが実感できる。
- ・書いた付箋紙を取捨選択したり、順序を入れ替えたりしやすい。
- ・付箋紙を色分けして書くことで、調べたことと感想・意見が一目で区別できる。

取材の過程では、付箋紙1枚に調べたことや思ったことを1つずつ書き、調べ学習シートに貼らせる。

構成の過程では、組み立てシートの「中」の部分に、取材で集めた付箋紙の中から自分の意見の根拠となる2つの事実を選んで貼らせる。さらに、それぞれの事実に関連する付箋紙を貼らせる。自分の意見が読む人に伝わるように順番を考えて付箋紙を並べ替えさせる。「終わり」の部分に、意見や具体策を書いた付箋紙があれば貼らせ、なければつけ加えさせる。

交流の過程では、互いの意見文を読み合い、表現の仕方に着目して良いところを付箋紙に書いて原稿用紙に貼り、交流させる。

オ 【モデル文の利用】〈構成・記述の過程〉

意見文の構成及び表現方法のイメージを持たせるためにモデル文を利用する。

森川編（2010）の具体的な見本を見せて完成イメージを持たせる指導実践や、市毛（2007）の様々な型の教材文から論理的文章の書き方を学ばせる指導方法を参考にモデル文（図1）を作成し、「どう書けばいいかわからない」という児童を支援する手立てとする。

モデル文は、書き方として児童に気付かせたい要素（「意見、事実①・②、意見と具体策」の構成、ナンバリング、接続の言葉、敬体・常体の統一、題名の工夫）を入れ、400字程度で作成した。意見を書いた後で理由を書き、最後にもう一度意見を繰り返す構成であ

		終わり 意見と具体策		中 事実① 事実②		ナンバリング		はじめ 意見	
接続の言葉	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
敬体 常体の統一	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	
	また、	さらに、	そして、	その結果、	このことから、	つまり、	すなわち、	このように、	

図1 モデル文

る。この構成を採用したのは、今回は初めての意見文の学習なので、児童にとって最も分かりやすく、今後の書くことの指導にも応用しやすいと考えたからである。意見文の書き方を理解させることによって、児童に書けそうだという見通しを持たせることができ、書いてみようという意欲も高めさせることができると考える。

カ 【3～5人グループでの推敲】〈推敲の過程〉

自分の意見が伝わる文章になっているか他の人に確認してもらうために、4人を基本として3～5人グループで推敲させる。3～5人で回し読みさせるのは、自分以外の複数の人に見てもらえることができるからである。さらに、少人数で行うため授業時間内に書き直す時間を確保できると考えたからである。互いの文章を修正し合い、他の児童の意見を取り入れて書き直させることによって、自分の意見がより伝わる意見文にさせる。

(3) 意見文の指導モデル

表2は、各学習過程に意見文を書くために必要な技能を身に付けさせる手立てを組み入れた指導モデルである。

表2 意見文の指導モデル

学習過程	時間	本時の目標	児童の主な学習活動	意見文を書くための技能を身に付けさせる手立て (ア～カは2(2)の本文に対応)
課題設定や取材	1時	自分の意見を見つけることができる。	・書いた意見文を活かす場を知る。 ・テーマに関して思い出したことや資料から読み取ったことを交流して、自分の意見を見つける。 ・自分の意見を「～しよう」と一文で書く。	ア 【意見文を活かす場を知らせる】 児童の書く意欲を喚起するために、書いた意見文を活かす場を児童に知らせる。 イ 【交流や話し合いの場の設定】 自分の意見を見つけさせるために、教師が提示したテーマに関して、今までの体験を思い出したり、資料から読み取ったことを交流したりさせる。 自分の意見をはっきりと意識させるために、一文で書かせる。自分の意見が見つけれない児童には、他の児童の文を参考にさせる。
	2時	意見の根拠となる事柄とそれに応じた取材方法を考えることができる。	・一つの例について、読む人に納得してもらうために、根拠としてどのような事柄をあげればよいか、それはどのような方法で調べることができるか話し合う。 ・話し合ったことを参考にして、自分の意見について、根拠となる事柄とそれに応じた取材方法を考える。	イ 【交流や話し合いの場の設定】 意見の一例をあげて、読む人に納得してもらうために、根拠としてどのような事柄をあげればよいか、それはどのような方法で調べることができるか話し合わせる。 話し合ったことを参考にして、自分の意見について、根拠となる事柄とそれに応じた取材方法を考えさせる。
	3時	事実と意見を区別して書くことができる。	・ワークシートを使って学習し、事実と意見を書き分ける。	ウ 【事実と意見を理解させるためのワークシートの利用】 ワークシートを使ってスモールステップで学習させ、事実と意見を書き分ける技能を身に付けさせる。
	4時 5時	意見の根拠となる事柄を見つけるために、調べ学習をすることができる。	・調べ学習をする。調べたことと思ったことは、別々の色の付箋紙に書く。	エ 【付箋紙の利用】 学んだことをもとに、事実と意見を書き分けさせる。付箋紙1枚に1つ、調べたことと思ったことを書かせ、書けたという達成感を積み上げさせる。
構成	6時	意見文の構成や表現の工夫を理解することができる。	・モデル文を使って学習し、意見文の構成や表現の工夫に気づく。	オ 【モデル文の利用】 モデル文を示して話し合い、構成や表現の工夫に気づかせることによって、意見文のイメージをもたせる。
	7時	意見文の構成を考えることができる。	・取材時に書いた付箋紙を取捨選択し、組み立てシートに並べて構成を考える。	エ 【付箋紙の利用】 モデル文で学んだことを活かして、自分の意見を分かりやすく伝えるために、付箋紙を取捨選択したり並べ替えて構成を考えさせる。
記述	8時	400字程度の意見文を書くことができる。	・組み立てシートをもとに、原稿用紙に記述する。	オ 【モデル文の利用】 モデル文で学んだことを活かして、自分の意見が伝わるように表現を工夫させる。
推敲	9時	3～5人グループで互いの意見文を推敲し、直された意見を取り入れて清書することができる。	・書いた意見文を3～5人グループで読み合い、互いの文章を推敲する。 ・他の児童の意見を取り入れて更に自分で推敲し、清書する。	カ 【3～5人グループでの推敲】 自分以外の複数の意見文を読み、事実と意見が書き分けられているか、意見が伝わるように書かれているかチェックし、赤ペンで修正させる。
交流	10時	意見文を読んで表現の良いところを見つけ、認め合うことができる。	・他の児童の意見文を読んで、表現の良いところを見つけて付箋紙に書き、原稿用紙に貼って交流する。	エ 【付箋紙の利用】 他の児童の意見文を読んで、表現の良いところを見つけて付箋紙に書き、原稿用紙に貼って交流させる。

(4) 指導モデルの効果をはかる方法

授業中の児童の様子やワークシートへの記入状況、毎時間の終わりに書かせる振り返りシート及び完成した意見文から、学習過程ごとの手立ての効果を検討した。

また、指導の前後に実施した児童意識調査及び指導の前後に同じテーマで書かせた課題作文を比較することによって、児童の意識がどのように変容したか、意見文で身に付けた技能を使えるようになったかどうかを検討した。なお、児童意識調査は国語科に対する意識と文章を書くことに関する意識についての11項目で行った。

3 研究の実践

所属校において、第5学年国語科「人と『もの』との付き合い方」の単元で検証授業を行った。指導計画は、指導モデルに沿って作成し10時間の指導時間とした(表2)。以下に、各学習過程における授業の概要及び児童の様子を述べる。

(1) 課題設定の過程〔1時〕

児童の書く意欲を高めるために、意見文を活かす場として、小学生向けの新聞への投稿と校内への掲示を提案した。ほとんどの児童は小学生向けの新聞を見るのが初めてで、実物を見せると興味深そうに読んでいた。

意見文のテーマについては、上記単元と同じテーマである環境問題とした。

まず、身近な環境問題に目を向けさせるために、事前に「身の回りでもったいないと思うことを3つ以上見つけてこよう」と課題を出しておいた。実生活の中から、まだ使える鉛筆を捨てること、食べ物を粗末にすること、買い物でつい余計な物を買ってしまうことなど、全員が3つ以上見つけてきたので、活発に交流することができた。

次に、「〈資料〉ごみ問題ってなあに」を読み、ものを大事にしているという観点で江戸時代の再生、修理、回収のこと、マラウイの子どもたちが使い終わった物を転用していることなどを読み取らせ、交流させた。ものを大事にすることも「もったいない」につながることを確認した。

それから、給食の残飯の写真を提示し、「給食を残さず食べよう」という意見の例を示した後、自分の意見を一文で表現させた。「水の出しっぱなしはやめよう」「まだ使える物のポイ捨てはやめよう」などの意見が黒板にあげられた。自分が見つけてきた「身の回りでもったいないと思うこと」とは別の意見にした児童が9名いた。板書から友達の考えや自分の気づかなかったことを知り、参考にしたようである。

交流の場を設定することにより、授業時間内に全員が自分の意見を一文に表すことができた。

(2) 取材の過程〔2・3・4・5時〕

自分の意見を構築するために必要な根拠となる事柄を調べるために、取材する内容と方法を話し合った。

「給食を残さず食べよう」という意見を例に取り上げ、読む人に納得してもらう意見文にするためには、どのような根拠を取り上げればよいか学級全員で考えさせた。児童から出た考えは「残飯の量」「給食調理員の気持ち」「給食費」だった。残したらもったいない、給食費もかかっているから残すとお金が無駄になるのもったいないと「もったいない」に関連させて話し合った。また、毎日一生懸命給食を作ってくれている調理員が、残飯があるとどんな気持ちになるかということも理由になると確認した。成長する時期に食べ残すと栄養をとれないことになるからと「栄養」も付け加えた。

さらに、どんな方法で調べるかについて問うと、児童はこれまでの経験からパソコン・本・インタビューをすぐに挙げた。調べる内容によってどの方法がふさわしいかについて話し合い、「残飯の量」「給食調理員の気持ち」は調理員へのインタビュー、「給食費」は家の人や事務の先生へのインタビュー、「栄養」は本やインターネットで調べることを板書して確認した。

その後、児童は板書をもとにしてそれぞれ自分の意見に適した取材内容と方法を考

振り返りシートには、「事実と意見・感想の見分けがつかうようになりました」「事実と意見の文を書くのが楽しかった」と書かれていた。ワークシートを利用してスモールステップで学習させることによって、容易に事実と意見の区別ができるようになった。

「事例」の文には——線を「意見」の文には~~~~線を引きましょう。	「事例」……………見たり「聞いたこと」たり「な案外にあったこと」	「意見・感想」……………思ったこと「考えたこと」判断した「なでひて」	「事例」の文には——線を「意見」の文には~~~~線を引きましょう。	① 車の窓から空き缶が飛んできた。ごみのポイ捨てはやめるべきだ。	② 日直は教室を移動するとき電気を消した方がいい。体育の時間、だれもいない教室で電気がついてた。これは電気のむだ使いだ。	「事例」と「意見」を区別して文章を書いてみよう。	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」	「事例」	「意見」
--	---	---	--	---	---	---------------------------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

振り返りシートには、「今日はいっぱい調べて楽しかった」「うまく調べられました」「リサイクルについて調べて、いろいろなことが分かりました」と書かれていた。

調へて つかつたこと 一人が 目へ使う水の量…… 約 11 リットル分	水道水は 1リットル 100円 以上 1リットル 100円 以上	水(1分間出)は 1リットル…… 12 リットル (12リットル 100円)	水を出しはなしにした事ある人 十人中 六人 だ。 (水を出しはなしに せずと後)
調へて 思つたこと 1人 1日 使う水の量…… 約 11 リットル分	水道水は 1リットル 100円 以上 1リットル 100円 以上	水(1分間出)は 1リットル…… 12 リットル (12リットル 100円)	水を出しはなしにした事ある人 十人中 六人 だ。 (水を出しはなしに せずと後)

意見文の構成や表現の工夫のポイントをつかませるためにモデル文（図1）を利用した。まず、モデル文を音読し視写させることで、これから書こうとしている意見文

の全体像をつかませた。次に、意見とその根拠としての事実が、どこに書かれているかを考えさせることで、「はじめ・中・終わり」の構成に気づかせた。最後に、モデル文の良い書き方や工夫を見つけさせ、ナンバリング、接続の言葉、敬体・常体の統一、題名の工夫などに気づかせた。

振り返りシートには、「意見文を書くとき、どういうふうに書けばいいのか分かった」「意見文にはいろいろな工夫がされていてすごいな」と書かれていた。

文章構成を考える方法を理解させるために、付箋紙を組み立てシート（図4）に貼り、実物投影機で映しながら説明した。組み立てシートの「はじめ」の部分に自分の意見を1文で書かせた。「中」の部分に根拠になる事実を取材時に書いた付箋紙の中から2つ選んで貼らせ、その事実に関連している付箋紙を貼らせた。「終わり」の部分に自分の意見や感想を書いた付箋紙があれば貼り、なければ意見や感想を付け加えさせた。

振り返りシートには、「構成がうまくできてうれしかった」「似ているような事実をまとめるのはむずかしかったです」「なぜふせん紙を使ったのか分かりました。何回でもやり直しできるというわけですね」などと書かれており、児童は付箋紙を貼り替えるながら、「はじめ、中、終わり」の内容を考えていた。

（4）記述の過程〔8時〕

モデル文（図1）で意見文の構成や書き方の工夫、原稿用紙の使い方について復習した後、組み立てシート（図4）をもとに意見文を書かせた。「はじめ」の部分は、モデル文を参考にして書かせた。その中には、「（自分が）〇〇したい」といった自分の意思表明の形で書いたものや、「（みんな）〇〇しよう」と訴えかける形で書いたものがあつた。「中」の部分は、理由を書いているので文末は「～だからです」と書くように指示した。ナンバリング、意見文の書き方、題名の工夫等、モデル文を参考にしながら書いている児童がいた。特に、書くことが苦手な児童にとってモデル文は参考になったようである。

振り返りシートには、「いい意見文が書けたと思う」「自分でいざ意見文を書いてみると、やっぱりむずかしかったです。でも、書けたのでよかったです」と書かれていた。モデル文を利用することによって、書くことが苦手な児童を含め全員が意見文を書くことができた。

（5）推敲の過程〔9時〕

自分の意見が読む人に伝わる文章になっているか確認するために、席が近い4人を基本に3～5人グループで推敲させた。推敲する観点とは、文章読み返しシート（図5）の項目の中から「②言いたいこと（意見）と、その理由は合っていますか」に絞って考えさせた。

児童は表記の間違いは修正したが、内容については修正しなかった。意見の根拠となる事実が適切かどうかの判断が難しかったようである。また、書きあげた意見文は修正しにくいようであった。推敲作業を行ったものの、ほとんど修正が入らない意見文が多かった。

終り	中	はじめ
年間のあつたりの給食費は約 4万4千円 年間5校の給食費は1232万円ぐら いだべつ	多い時はバケツのまん中くらい 少ない時はバケツの底ぐらい 一番多い食は強しは ポイルキャベツです。	多い時はバケツのまん中くらい 少ない時はバケツの底ぐらい 一番多い食は強しは ポイルキャベツです。

図4 組み立てシートへの記入例

文章読み返しシート	
年 組 名 前	
① 言いたいこと（意見）と、その理由は合っていますか。	チェックする 観点
② 言いたいこと（意見）と、その理由は合っていますか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
③ 「はじめ・中・終わり」の構成になっていますか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
④ 事実と意見・根拠を区別して書いていますか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
⑤ つなぎ言葉や題名の工夫をしていますか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
⑥ 主語と述語は対応していますか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
⑦ 「だ・である」と「です・ます」がまじっていませんか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
⑧ 漢字や送り仮名のまじりはありませんか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
⑨ 句読点（、）かき（、）などは適切ですか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △
⑩ 長さで分かっていく文はありませんか。	① 〇 △ ② 〇 △ ③ 〇 △ ④ 〇 △ ⑤ 〇 △ ⑥ 〇 △ ⑦ 〇 △ ⑧ 〇 △ ⑨ 〇 △ ⑩ 〇 △

図5 文章読み返しシート

(6) 交流の過程〔10 時〕

まず、モデル文（図 1）を掲示し、根拠となる事実をあげていることや書き方の工夫について学級全体で確認した。

次に、推敲の過程とは違うグループで、他の児童の意見文の表現の良いところを付箋紙に書いて、それぞれの児童の意見文に貼らせた（図 6）。2つのグループの意見文を読み合ったが、「他のグループの意見文も読みたい」という声もあった。自分の席に戻った時に、児童は自分の意見文に貼られた付箋紙を熱心に読んでいた。

最後に、自分の意見文に貼られた付箋紙の内容を発表させた。

振り返りシートには、「お互いの良いところを書き合ったので楽しかった」「みんなとても上手に書いていました。まねできるところはまねしたいです」と書かれており、児童も付箋紙を使った交流は良いと実感していた。

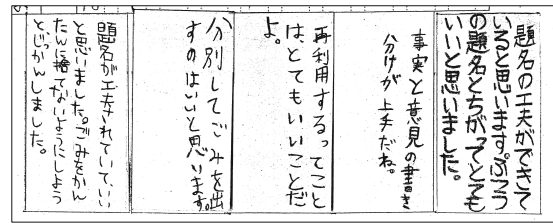


図 6 付箋紙を使った交流

4 研究の考察

(1) 各学習過程の手立ての効果について

ア 成果

書くことが苦手な A 児及び学級の児童全体の変容を挙げて考察する。

意見文の指導前に「自分が大切にしているもの」をテーマに課題作文を書かせたが、A 児は大切なものとその理由を原稿用紙にわずか 4 行しか書くことができなかった。しかし、指導モデルに沿って指導することにより、「はじめ、中、終わり」の構成で、意見の根拠を 2 つ挙げて原稿用紙 1 枚分の意見文を書くことができた。

A 児は課題設定の過程においては、「まだ使える物のポイ捨てをやめよう」と一文で表すことができた。これは、自分が見つけてきたことではなく、他の児童と交流する中で A 児が自ら選んだものである。また、取材内容は「ごみの量とリサイクルについて」、取材方法はパソコンと本を用いると決めた。決める時には、学級全体で話し合ったことを参考にしていた。調べる内容と方法が明確になったので、自分の力で学習を進め、調べたことを付箋紙に書くことができた。A 児にとって学級全体での意見の交流や話し合いが、自分の意見を見つかったり取材内容や方法を決めたりすることに有効であったと考える。

A 児の振り返りシートには、事実と意見を学習した後は、「事実と意見のちがいが分かった。文を書くときに役に立つ」と、また、モデル文を利用して構成の仕方を学習した後は、「もっと文を工夫しようと思った」「ふせん紙を並べかえながら構成する方法がよく分かった」と書かれていた。

記述の過程においては、モデル文を参考にしながら事実と意見を意識して、「はじめ、中、終わり」の構成で意見文を書くことができた。事実と意見を理解させるためのワークシートやモデル文、付箋紙の利用も A 児にとって有効であったと考えられる。

ただ、推敲の過程においては、A 児はグループの他の児童の意見文を修正できていなかった。また、A 児の意見文についても、字の間違ひは修正されていたが、内容についての指摘はなかった。

図 7 は A 児とは別の児童が書いた意見文である。指導モデルに沿って指導することで、書くことが苦手な A 児を含めて学級の全ての児童が、根拠をもとに自分の意見を持ち、「はじめ、中、終わり」の構成で書く



図 7 児童が書いた意見文

ことができた。ナンバリングや敬体・常体の統一も全員ができていた。

以上のことから、意見文の指導モデルの課題設定や取材、構成、記述、交流の過程の手立ては有効であったと考える。

イ 課題及び修正点

今回の授業では、推敲の過程で、書き上げた意見文を席が近い3～5人グループで読み合って、根拠の妥当性について検討し修正させた。しかし、児童の意見文はほとんど修正されていなかった。原因として、書き上げた意見文は修正しにくいことや、根拠が妥当かどうか判断できなかったなどが考えられる。

そこで、以下のように指導モデルを修正することとした。構成の過程を1時間増やし、互いの組み立てシートを読んで話し合う時間を設定する(表3)。組み立てシートに付箋紙を貼って構成を考えた段階で、意見が同じ者同士のグループで話し合い、適切な根拠が示しているかどうか確かめさせる。こうするのは、付箋紙なら簡単に並べ替えたり、書き加えたりすることができ、また、同じ意見について調べているので、根拠として適切かどうか判断しやすいと考えるからである。なお、根拠の妥当性を見抜く力をつける練習は、意見文の指導の時だけでなく、例えば説明的な文章を読み取る学習等においても繰り返し行う必要がある。

表3 指導モデルの修正部分(部分)

学習過程	時間	本時の目標	児童の主な学習活動	意見文を書くための技能を身に付けさせる手立て (ア～カは2(2)の本文に対応)
構成	8時	自分の意見の根拠を適切に示しているか、自分の意見が伝わる構成や表現になっているか確かめることができる。	・意見が同じ者同士で、各自の組み立てシートを読んで話し合い、根拠の妥当性、構成、表現について確かめる。	カ 【グループでの話し合い】 意見が同じ者同士で、各自の組み立てシートを読んで話し合い、根拠を適切に示しているか、意見が伝わる構成や表現になっているか確かめさせる。
記述	9時	400字程度の意見文を書くことができる。	・組み立てシートをもとに、原稿用紙に記述する。	オ 【モデル文の利用】 モデル文で学んだことを活かして、自分の意見が伝わるように表現を工夫させる。
推敲	10時	書いた意見文を推敲し、清書することができる。	・文章読み返しシートを使って推敲し、清書する。	自分の意見が伝わる文章になるように構成や表現を確かめさせる。

※1時～7時は表2の指導モデルと同一のため省略している。表2の10時を11時とする。

(2) 児童の意識の変容について

児童意識調査の書くことに関する項目のうち2項目を取り上げる(図8)。「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように書いている」についての肯定的回答は、指導前の45%が指導後は70%に増えている。「文章を書くとき、読み手に分かりやすい文章にしている」は、指導前の60%が指導後は79%に増えている。この2項目では、 χ^2 検定(注3)により肯定的回答数が有意に増えたことが確かめられた。

つまり、意見文を書く授業を終えて、児童は理由を書くことや読み手に分かりやすい文章にしようとする意識が高まったといえる。

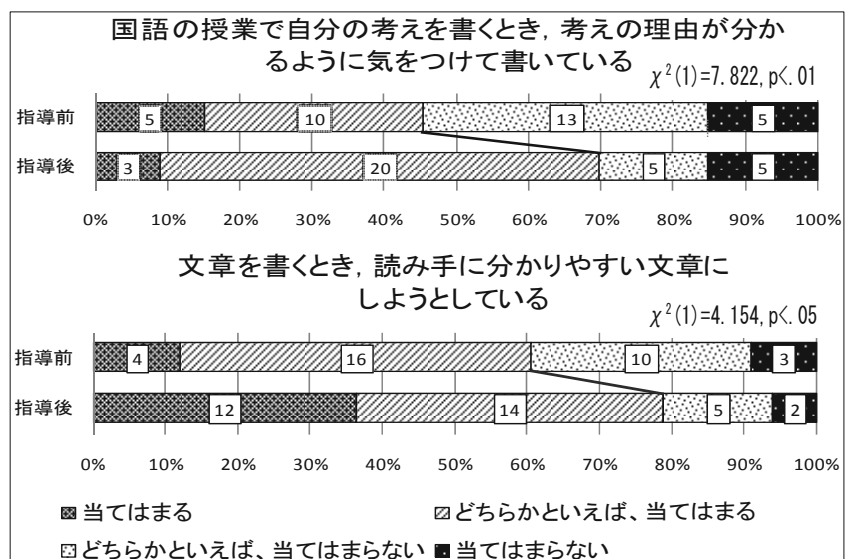


図8 児童意識調査から(一部抜粋) ※グラフの中の数字は人数

（３）意見文の学習で身に付けた技能の応用について

図 9 は、単元指導の前後に同じテーマで書かせた課題作文について、5つの評価ポイントをもとに達成した児童の割合を比較したものである。指導後は全員が自分の意見の理由を書くことができており、いずれの項目も指導後にできるようになった割合が増えている。

学級の中で作文を書く力が標準的なB児の例を挙げて述べる。意見文を指導する前に書かせた課題作文では、B児は「私にとって一番大切なものは友達です」と書いて、その理由をいくつかあげていたが、まとまりのない書き方になっていた。しかし、指導後の課題作文は、ナンバリングを使って理由をあげ、終わりに結論を書くなど整った書き方になっていた。

意見文以外の指導はしていないので、児童は意見文を書くときに身に付けた技能を、意見文以外の文章を書くときにも使うようになったと考える。

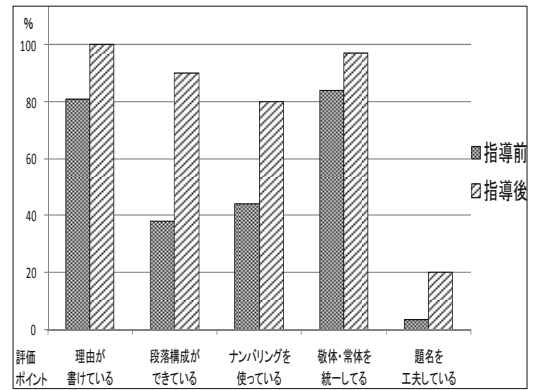


図 9 指導前と指導後の課題作文の比較

5 おわりに

今回の指導は、児童にとって初めての意見文を書く学習だったので、「意見、事実①・②、意見と具体策」の構成とした。この学習を終えた第6学年の児童に対しては、より説得力のある意見文を書くために、予想される反論と、それに対する自分の考えを入れるなど構成を工夫させたい。また、意見文を書く技能をさらに定着させるために、テーマを変えるなどして何度も繰り返し指導していきたい。

本研究においては、指導モデルに沿って指導することで、書くことが苦手な児童を含め全員が意見文を書くことができた。それに伴い、今回作成した意見文の指導モデルの有効性も示すことができたと考えられる。また、本校の研究主題に関わって、書く力をつけるための1つの方法を示すことにつながった。今後、意見文を書かせるための手立てを意見文以外の文章を書かせる指導にも応用して、児童の書く力を一層高めていきたい。

〈注釈〉

注1 文部科学省『これからの時代に求められる国語力について』（2004）

注2 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』（2008）

注3 回答の偏りの統計的な差（有意差）を求める検定方法。なお、ここでは事前調査の回答数を期待値として処理した。また、P値は有意の水準（有意確率）を示す。通常、.05(5%水準)より小さい場合に有意差があるとされる。

〈参考文献〉

- ・首藤久義『書くことの学習支援一場を作り個に即して書く生活の向上を助けるー』東洋館出版社（2004）
- ・井上一郎『誰もがつけたい説明力』明治図書（2005）
- ・有元秀文監修『ベネッセ発小学生からの「考えて書く力」』日経B P社（2006）
- ・井上一郎編著『書く力の基本を定着させる授業 書けない子を書けるようにする』明治図書（2007）
- ・市毛勝雄編著『論理的文章の書き方指導 小学校編』明治図書（2007）
- ・瀬川榮志監修『「書くこと」の習熟度別指導ステップワーク集 高学年編』明治図書（2007）
- ・瀬川榮志監修『高学年の書くことの指導』明治図書（2008）
- ・野口芳宏編著『子どもを動かす国語科授業の技術 20+α』明治図書（2009）
- ・野口芳宏『教師の作法 指導』さくら社（2009）
- ・横浜市教育委員会『横浜版学習指導要領 国語科編』ぎょうせい（2009）
- ・森川正樹編『どの子も必ず書けるようにする国語授業の勘所ー「つまずき」と「ジャンル」に合わせた指導ー』明治図書（2010）